

受けて、尊厳死 死から何を学ぶ

医学博士 長尾 和宏

民間療法ではなく標準治療を

小林麻央さんが6月22日に亡くなられた。34歳というあまりにも早い旅立ち。自宅での尊厳死であった。しかし、夫の海老蔵さんは旅立ちの翌日も舞台を休まなかつた。2人の子供に「役者とはこういうものだ」と背中で教えようとしていたのか。

今回、麻央さんの死から我々は何を学ぶべきか考えてみたい。彼女は2014年2月の人間ドックで乳房のしこりを指摘された。がんが疑われるものの確定には至らなかつた。その後8ヵ月後に、脇の下に転移を認め乳がんと診断された。この時にはすでにステージIVで診断の遅れが致命傷になつた。乳がんは10年生存率が80%と、おとなしいがんに分類されている。30代後半～40代後半に多く、他のがんとは年齢層が明らかに異なる。

乳がん検診の対象は40歳からだが、30代の乳がんも増加傾向にある。麻央さんの報道を受けて検診を受ける20、30代も急増している。一方、科診は、高濃度乳房にできるがんを見逃す可能性が指摘され、乳房エコー検

との併用が推奨されている。将来的にはより低負担のレントゲンとエコーを組み合わせることになるのだろう。いずれにせよ、乳がんは自分で触つて発見できるがんだ。また麻央さんのように30代の進行の早い乳がんもあるので、早期発見・早期治療が何より大切である。

麻央さんは標準治療よりも民間療法に頼ったと伝えられている。現代医療を全否定する本が書店に並ぶ影響なのか、私の周囲でも標準治療を拒否するがん患者さんを散見する。

その人がもし後期高齢者であれば、そうした選択に賛成するだろうが、若い人ほど専門医に行き、精査の上標準治療を受けるべきである。確かに現代のがん医療には反省すべき点も多々あるだろう。しかし、だからと言って放置したり、いきなり民間

医療に命を預ける選択は危険過ぎる。また、巷には医療否定本ブームに乗じた似非医療が横行している。弱みや不安につけこむ詐欺に近いようなものもある。メディアや行政はこれらを厳しく監視・規制すべきだろう。

彼女がかなり深刻な状況にある、と海老蔵さんが記者会見したのは2016年6月。麻央さんは同年9月

にブログ「KOKORO」を開設した。「がんの陰に隠れているそんな自分とお別れしようと決めました」と、ブログを始めた理由も綴っていた。たつた1カ月で、ブログの読者数は200万人を超えた。ブログ更新はその一つひとつが社会現象となつていった。同じように、「がんと闘っている人やその家族がこのブログに励まされ、考えさせられた。どんな医者が患者さんを励ますよりも、麻央さんのブログの方が力を持つた。

麻央さんはSNSという手段を使い、自分自身の魂を鼓舞すると同時に、期せずして多くのがん患者さんの心のケアをする立場となつた。それにも死の3日前まで、自身の病状や感情を、ここまで素直にかつ詳らかにブログで綴つた有名人がこれまでいただろうか。若くて美しい芸能人ほど、がんになつた自分の姿を隠したがるものだろう。抗がん剤治療で髪が抜ける様子や、肌艶を失つて痩せ細つっていく姿、鼻にチューブが入つている姿を、誰が好き好んで衆人に晒すだろうか。しかし



長尾和宏
(ながお かずひろ)
医療法人社団裕和会理事長、
長尾クリニック院長

1984年 東京医科大学卒業、大阪大学
第二内科入局、

1991年 医学博士（大阪大学）授与
1995年 兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業、現在に至る

日本慢性期医療協会理事、日本ホスピス
在宅ケア研究会理事、日本尊厳死協会副理事長、全国在宅医療支援診療所連絡会理事、関西国際大学客員教授

【医学博士】

日本消化器病学会専門医、日本消化器内視鏡学会専門医、指導医、日本在宅医学学会専門医、日本禁煙学会専門医、日本内科学会認定医、労働衛生コンサルタント

【著書】

『平穏死・10の条件』（ブックマン社）、
『抗がん剤・10のやめどき』（ブックマン社）『胃ろうと』（セブン＆アイ出版）『がんの花道』（小学館）『抗がん剤が効く人、効かない人』（PHP研究所）『大病院信頼、どこまで続けますか』（主婦の友社）など。医学書

スーパー総合医叢書・全10巻の総編集
（中山書店）第一巻『在宅医療のすべて』、第二巻『認知症医療』など多数。

在宅医療を 小林麻央さんの

0人の1人に選び彼女の勇気を評価した。少なくともあのブログを開設した時点で、キューブラーロスが言う死の5段階の「死の受容」の域に達していたと思われる。

ブログに綴られた在宅医療

病院から退院した5月29日のブログには、「やはり我が家は最高の場所です。今日から、自宅でお世話をします!!子供達はもうすぐ公園から帰ってくるようです。早く会いたい」と綴られている。彼女は在宅医療に切り替えたのだ。6月11日には「昨日は一日、痛みで七転八倒していました。ですが、夕方最終的に、在宅医療の先生に相談し、忘れていた座薬を試したら、ようやく落ちつ

くことができました。眠る前も予防で座薬を使い、今朝は、ほんの少しの痛みで起き上がることができました」と書かれている。

在宅医療は、病院より痛くて辛いのではないかと思っている人がまだ多い。しかし、むしろ家族の顔を見てリラックスして過ごせるので痛みが少ないことが多い。突然痛みが強くなつた時は、定期の麻薬に加えて、「レスキュー」と言って、速効性の高い麻薬を追加投与すると30分前後で痛みが消えるものもある。6月17日には「今朝も在宅医療の先生がいらして、症状に合わせ、お薬や点滴の量を調整して下さいました。心強いです。」と書かれている。当初は在宅医療に不安があつたが、

徐々に信頼している様子が伺える。自宅でも病院と同様の緩和ケアを受けられることを世間に知らしめた。

そして6月20日には、「ここ数日、絞つたオレンジジュースを毎朝飲んでいます。今、口内炎の痛さより、オレンジの甘酸っぱさが勝る最高な美味しさ!朝から笑顔になれます。皆様にも、今日笑顔になれることができるように」と書かれている。

しかしこれが、最後のメッセージになつた。亡くなる3日前の笑顔がアップされ、亡くなる前日まで食べ物を口にしていた。在宅で尊厳死することとは、最期まで口から食べられて、「愛してる」と話しができることも世間に知らしめた。

海老蔵さんは記者会見でこう述べた。「自宅で送つてあげられたことはよかつたと思う。お母様もお父様も、私もお姉さんの麻耶さんも、子供達もずっとそばにいられた。父(市川団十郎)を病院で亡くしている。病院の時とは違う、家族の中で、本当にかけがえのない時間を過ごせた」。在宅療養という選択に満足しているように映つた。人生最期の貴重な時間を人間の尊厳を大切にして家族と普通に生活することができた。